

サロンで

アントニア：エミリオ、エミリオ、そのジャム使う？

エミリオ：あ、いいや、どうぞお取りください。

アントニア：有難う。

アントニア：このティーバック使う？

エミリオ：いえ、いえ。

アントニア：ミゲルを見て、いつものことをまたやっているわ。

ミゲル：さて、温かいお茶でも頂くか、なあに？彼女はお金持ちだ、彼女も同じだ。

アントニア：ミゲル、貴方は彼女を利用している、なぜなら、彼女は頭がおかしいのよ、正常ではないの。

ミゲル：しかし、なんでそんなことを言うのだろう？私は彼女のために尽くしているのだ。

それだからこそ、少なくとも、彼女はあちらこちらと気を紛らわしているのだ。

アントニア：そう、毎日お金をだまし取るのが、人助け？

ミゲル：いいや、私は悪いことはしていない。毎月仕送りを受けても、彼女のボケた頭では、それを使うことができないだろう？つまらない。どちらを選ぶ、本当のことを言えばいいか？“ねえ、ドウニャソル、息子さん達に電話を掛けても迎えにはきませんよ“って？これにどんな価値がある？私は彼女に希望を持たさせ、私も金を貰う、悪いことかな、共によいとおもう。

アントニア：もちろん何と恥知らず、ミゲル！

エミリオ：言いたのだけれど、モデストはどうなのか？

ミゲル：モデスト？おお、長い日々だな、アルツハイマーを患っている、どこに居るのかもわからない。

ドローレスがいなかったら、とっくに二階に行っている。

アントニア：ドローレスは聖女のような、モデストに尽くしている。彼女は健康なのに、夫を介護するためにここに入ったのよ。

ミゲル：ええ、何と馬鹿げている！つまらないことに、人生を棒に振っている。モデストには彼女も、腐ったレタスも同じだ。

アントニア：ミゲル、何と粗暴な！どうして、そんなはずはない！例え正常に見えなくとも、モデストは分かっています。

ミゲル：何を言っているの、分かるはずがない。

エミリオ：ええ、私も分かっていると思う。

アントニア：もちろんよ、ねえ？エミリオも私の考えと同じだわ。

ミゲル：二人とも、センチメンタルなのだ。

アントニア：あなたは人生を辛いものを感じてい、るミゲル、あなたは老いに怒りを感じている。

ミゲル：誰が？人生を辛いと思っている？何故、私は老いを楽しんでいる。素晴らしい。君は人生の殆どを懸命に働き、孫の世話もできなくなった、ここに入れられる、家族からrそして忘れられる。最高だ！

アントニア：そんなこと事実でない、そんなこと言わないで！家族は私を愛しています。私がここに居るのは、家族に迷惑を掛けないため。貴方に言いたいが、決まりがあります、若い人にも彼らの生活があることを。